課題名　オンラインによる大学教育に関する調査のデータ解析

研究代表者名　小嶋　秀樹（教育情報アセスメント）
研究組織等　神谷　哲司（教育心理学）
安保　英雄（教育心理学）
深谷　優子（教育心理学）
熊谷　龍一（教育情報アセスメント）
後藤　武俊（教育学）

研究の背景・目的

本企画研究は，前年度に同メンバーによる企画研究「オンラインによる大学教育に関する研究」において実施したアンケート調査およびインタビュー調査について，詳細にわたる分析を実施したものである。

これら調査は，コロナ禍におけるオンライン教育の意義・問題点・課題などを明らかにするため，東北大学教育学部および大学院教育学研究科（博士課程前期 2 年の課程）の学生が 2020 年度第 2 学期に受講したオンライン授業を対象として，学生の受講環境や授業への取組の実態，満足度・感想，成績評価に関する考え，改善に向けた要望，コロナ禍における精神健康面の状態などをオンラインでアンケート調査した。また，この調査への回答者の一部について，上級生が聞き手となる半構造化ピアインタビューにより，オンライン教育，とくに成績評価に対する印象・考えなどについての聞き取りを併せて実施した。

本企画研究では，これら調査データを分析し，学生にとってのオンライン教育の実態を明らかにするとともに，今後の教育環境・教育方法や成績評価のあり方についての知見を得ることを目的としている。

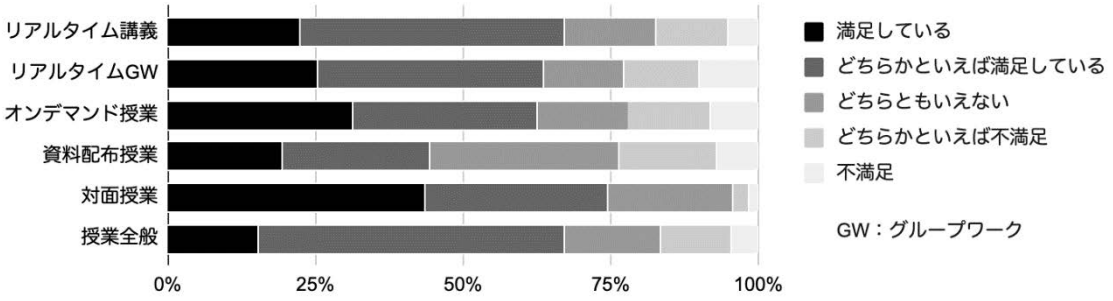
研究の成果（概要）

アンケート調査の分析結果

学部生 77 名（回収率 26%），大学院生 38 名（回収率 46%）の回答から，以下の特徴が明らかになった。

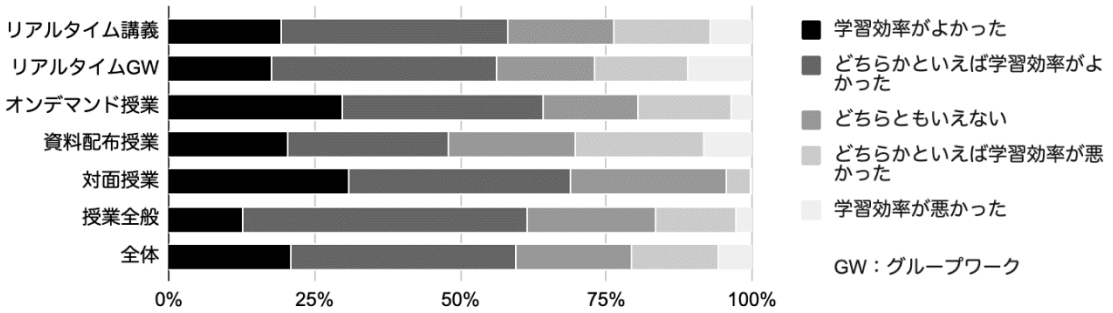
（1）仙台圏外の実家等からの受講は 10%未満であり，多くは仙台圏のアパート・寮・実家から PC を用い，容量制限なしの安定した WiFi 接続によって受講していた。

（2）授業に対する満足度については，対面形式では 75%が「満足」または「どちらかといえば満足」と回答したが，リアルタイム形式では 66%，オンデマンド形式では 64%，資料配布形式では 44%であった。（次図参照）



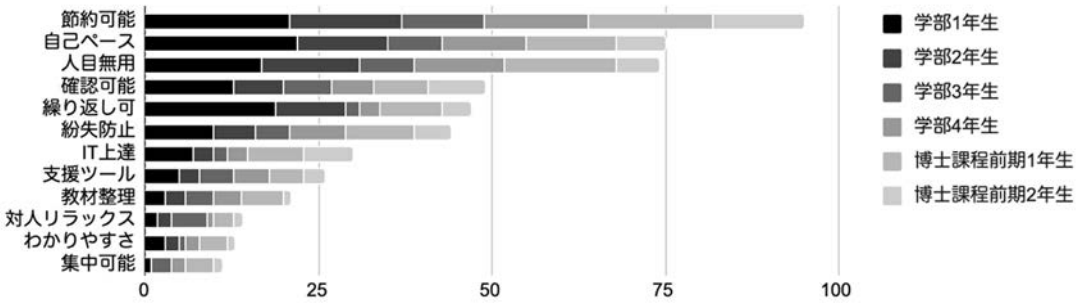
授業形式ごとの満足度分布（学生全体）

(3) 学習効率について「学習効率がよかった」「どちらかといえば学習効率がよかった」と回答した学生は，対面形式では 69%であったが，リアルタイム形式では 57%，オンデマンド形式では 64%，資料配布形式は 48%となった。（次図参照）



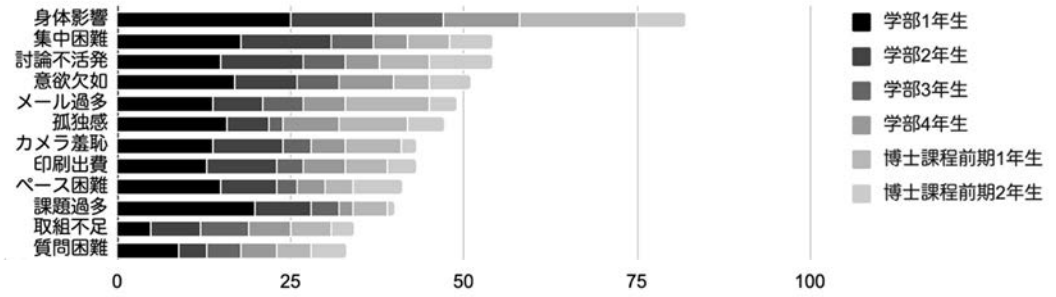
授業形式ごとの学習効率感分布（学生全体）

（4）学生の感じるメリットとしては，移動時間や交通費の節約（82%），人目が気にならないこと （64%），学習ペースの自由度が高い/疑問点等の確認が容易/繰り返しの視聴が可能（64/43/41%）等が回答された。（次図参照）



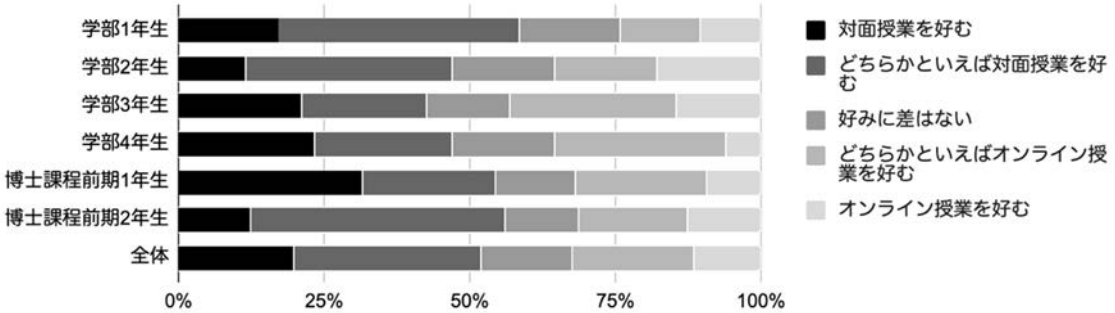
オンライン授業のメリット件数（複数選択可・計 115 名・上位 12 件のみ）

一方，デメリットとしては，目の疲れなどの身体影響（71%），不活発な討論（47%），集中力/意欲の欠如（45/44%）等が回答された。（次図参照）



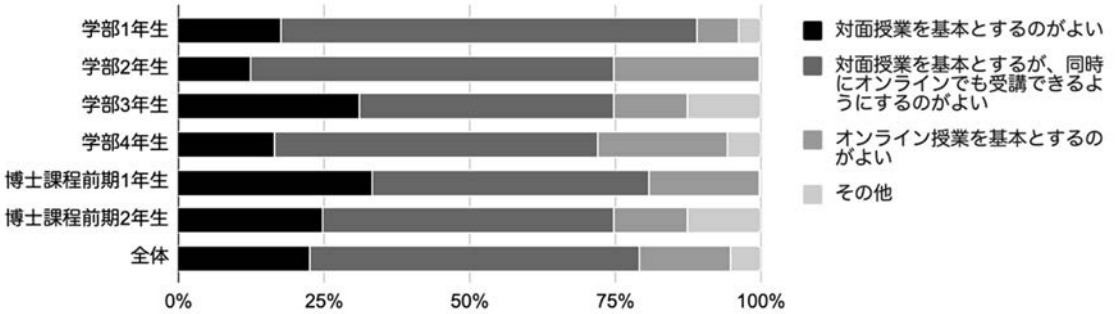
オンライン授業の困りごと件数（複数選択可・計 115 名・上位 10 件のみ）

（5）総合的な比較において学生の 52%が対面授業を，32%がオンライン授業を好むと回答した。（次図参照）



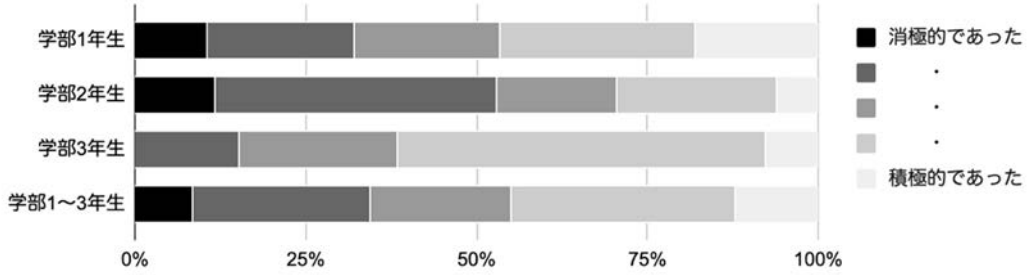
対面授業とオンライン授業の選好分布

また，来期に希望する授業形態としては，オンライン授業または対面授業併用が 72%，対面授業が 23%となった。（次図参照）



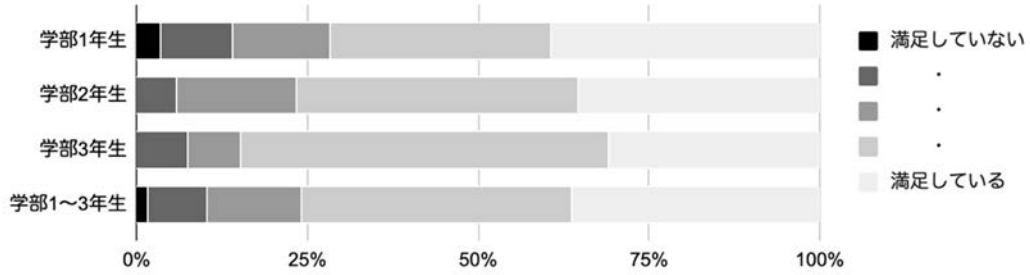
アフターコロナにおいて希望する授業形態の分布

（6）受講態度について学部生に質問したところ，学年ごとにバラツキのある回答が得られた。（次図参照）



学年ごとの受講態度（主観評価）の分布（58 名）

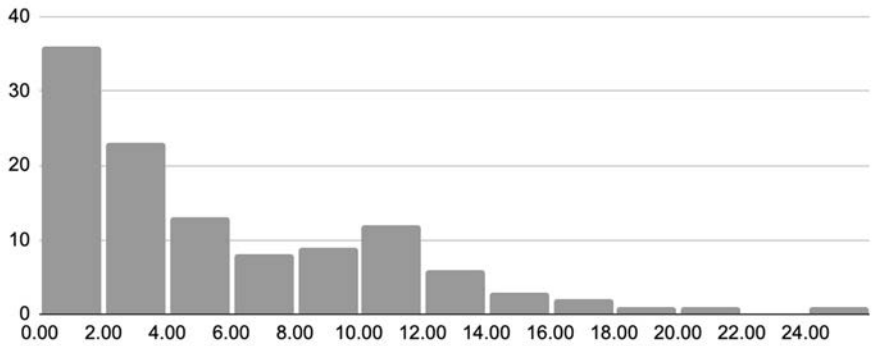
また，成績評価に対する満足度について質問したところ，学年を問わず，約 75%がポジティブ（上位 2 択）に回答している。（次図参照）



学年ごとの成績評価への満足度の分布（58 名）

（7）研究が主活動となる学部 4 年生以上では，先輩/同級生への相談困難（73%），研究意欲の減退（58%）がオンライン教育の課題として多く回答された。

（8）精神健康面の調査（K6 指標）では，学生の 21%が要観察（5～9 点），11%が要注意（10～12 点），10%が「心理的苦痛あり」（13 点以上）と判定された。（次図参照）



Ｋ６点数の度数分布（2 点刻み・計 115 名）

インタビュー調査の分析結果

上記調査への回答者の一部（学部生 9 名）について，上級生が聞き手となる半構造化ピアインタビューを実施し，オンライン教育，とくに成績評価に対する印象・考えなどにつ

いて聞き取りを行った。

（1）学部 1 年生（6 名）からは，自分の成績に納得感をもっている回答が多かったが，予想外に良い成績があったことから評価方法への疑問を呈したケースも見られた。

（2）上級生からは，実験やグループワークにおける分担上・評価上の不公平感などが回答された。また，出席確認の難しさ，提出物へのフィードバックの少なさ，オムニバス授業に対するネガティブな見解など，授業運営に関する問題も指摘された。

教員へのアンケート調査

学生へのアンケート調査・インタビュー調査と並行して，教員からみた成績評価に関する実態を参考情報として得るため，教員へのアンケート調査を行った。27 名の教員から回答が得られた（回収率 79%）。成績評価方法を変更したと回答したのは 32%であり，その多くが「評価基準を下げた(高い評価を与えた)」「成績のばらつきが少なくなるようにした」と回答している。

総括

以上の調査結果から，学生たちはオンライン授業を概ね好意的に受け入れ，そのメリットとして経済的・時間的な効率性や自由度の高い学び方などを享受しつつも，身体的な負担や授業への主体的なエンゲージメントに問題を感じていたことが明らかになった。また，研究が主活動となる上級生においては，日々の研究活動や調査・実験などが制約されてしまい，精神的なストレスを受けていたことが判明した。また学部生へのインタビューからは，成績評価方法への不透明性や共同作業の難しさなどが示唆された。本調査から得られた知見をもとに不断の教育研究・環境改善を続け，オンライン教育の利便性と納得のいく評価，そして主体的で自由度の高い学習・研究を両立させていきたい。

なお，本調査と分析結果の詳細は，本年度に教育学研究科から発行する「エンゲージドラーンニングによるグローバル教育リーダーの育成事業（報告書)」に掲載する。